



人間牧場主・年輪塾々長
若松 進一

みんなのでつくる 小さな自治

ある大学の入試に、「自治とは何か」という問題が出されました。ある受験生は真顔で「自治とは宝くじのことである」と書いたそうです。笑うに笑えない話ですが、じゃあ市役所や町村役場に勤めている自治体職員に、「自治とは何か」という同じ質問を投げかけて、果たして何人の人が明快に説明をすることができたらどうかと、少し不安になってきました。

10年前のひとつ全国には三千二百を越える市町村があり、地域住民のかゆい所に手が届くほど手厚い行政が行なわれていて、住民の殆どはある意味何もしくなくても、それなりの豊かな暮らしを享受することができていました。

しかし大きいことはいいいことだと平成の大合併が行なわれ、「サービスは高

い方に、負担は低い方に」という約束等「言った覚えがない」と言わんばかりにほごにされ、サービスは遠のき負担は高くなる一方で、行き場のない不満を二合併するんじゃないやあなかった」と、ブツブツ言ったところで後の祭りの謗りを免れないのが現状です。

今、地方は伸びる社会から縮む社会へと舵を切り、愛媛県内では高齢化率六十%の集落が二百九十地区、八百六十集落は人口四十五人以下という、このままほおっておくと縮むどころか消滅の心配すらしなければならなくなっているようです。

「自分たちの地域は自分たちで守る」、これは昔も今も変わらない自治の精神ですが、過疎と高齢化、少子化と産業不振にあえぐ町や村や校区・集落を、自分たちの力で守ることは口で言うほど容易なことではありません。道路事情も悪く車とてなかった昔は、地域の中でおおよそ全てが完結していました。

経済も情報も人間関係もローカルのミクロで、のんびりゆつくり動いていたので、さほど外のことや将来のことを気にする必要はなかったのです。ところが最近はその気になれば日本の中心東京は、日帰りできるほど時間的に近くなり、インターネットという優れ物が居ながらに

して瞬時に、国内はもとより世界各国と通信ができるようになったのですから驚くほかはありません。このように著しく進歩し便利なる世の中でありながら、一方で何故不便になったり、人の心に閉塞感が漂うのか、これはとても難解な二面性を持った世情なのです。

「みんなのでつくる小さな自治」を考える場合、私たちはこれまでのようなものねだりをする、足し算型のまちづくりを目指してきた生き方を、改めることから始めなければなりません。つまり暮らし方をつましくするので、暮らしの自己採点をしてみれば、日々の暮らしがいかに無駄が多く、無駄のためにあくせく働いているかがよく分るのです。

今の暮らしは一人に車一台、一人にスマートフォン一台、各部屋にテレビとエアコンがそれぞれ一台、そして冷蔵庫は有り余る食料品で溢れ、栄養過多な食事で病気になるという珍現象まで起こっているのです。これでは幾ら稼いでもお金が足りないはず。

一方地域に目を転じれば、高齢者だけの家庭がどんどん増え、独居や空き家が目立ち、田畑も作り手・担い手がいなくなり荒れ放題です。地域で集会しても人が集まらないし、当たり前だった人の世話をすることを嫌う人が増え、隣組の



付き合えしえない孤立無縁を望む人も
いるのです。

地域自治は物の豊かさより心の豊かさを基本にしますが、かといって不便極まりない地域に人は住むはずもなく、ぼろは着ても心は錦という訳には行かず、教育、文化、福祉、経済、産業、情報、生活、防災・防犯といった地域で暮らす上で必要な最低限の条件を自分たちの力で賄おうとするものです。その上でこれまでは便利さや快適さを求め過ぎて分断されてきた人縁・血縁・地縁を大事にして地域力を高めなければなりません。

これまでどちらかという外に向いていた目を、内向きに見直してみようと、「何にもない」と嘆いていた自分たちの地域に、資源がいっぱいあることに気付くのです。ゴミと思っていた砂浜に打ち上がるホンダワラが、藻塩の原料になったり、役目を終えたと思われていたお年寄りが、生活の知恵袋として重宝が

られるようになるのです。

自治の基本は何かをしてもらう入力から、何かをするという出力への転換でもあります。そのためにはキーワードを「出す・出させる」に置き、手順を踏んで進めなければなりません。まず①顔を出す・ださせる参加者の巻き込みから始めます。ローカルコミュニティは内から外に出さず、外の人を内に入れることを嫌う封建的な風潮があります。来る人拒まず去る人追わずくらいな気持ちで、まず楽しいことから始めることです。

次に②口を出す参画です。日ごろ考えていることを発言させ、地域課題を共有します。ワークシヨップはその手法の一つで、知らないことに気付きます。時には声なき声を吸い上げるため意識調査も有効かも知れません。

次は③手を出す行動です。いいことは直ぐに実行する。悪いことは直ぐに止めるくらいな気軽な気持ちで手を出せば、知らない間に「自分たちの地域は自分たちで守る」という意識とともに、住民の一人としての自覚が芽生えてくるのです。

④汗を出すのも有効な手段です。人間は得てして「こうあるべきだ」と頭で考えがちですが、一緒に汗を流すとより深い人間関係や問題へのかかわり方が肯定的になるようです。

現代社会は高学歴で知識を持った人が多いのですが、住民自治には知ってることよりも生かすことが大事で、⑤知恵を出すと心がホットになるのです。

これまでの住民自治は、補助金や助成金を当てにして何でもタダの風潮が強かったのですが、これからは投資的な⑥金を出すことや活動資金を儲けなければなりません。

これ以外にも情報を発信(出す)したり、外の人と交流(出る)するなど色々ありますが、やはり最後は⑦結果を出す、つまり地域の人の暮らしが便利になり、地域への誇りが生まれることが大事なようです。この七項目を満たせば小さな自治という七色の虹は、どうやら自分たちのものとなるようです。

「入試出た 自治とは何か 真顔にて
宝くじだと 書いて落っこち」
「汗出して 次は知恵出せ 金を出せ」
それが嫌なら 辞表出せ」
「基本です 住んでる地域 自らの
力を守る 気概持たねば」
「ゴム紐は 伸びるものかと 思いき
や 古くなったら 縮むものです」
(若松進一 笑虎啖呵より)